　訳業は遅々として進まなかった。私は翻訳家でも作家でもない。今でもそう思っている。しかし今や誰も訳せるものがいないという事情があった。

　私はただ日々畑を耕していた。知らない土地を転々とさせられているうちにいくつかの外国語を話せるようになった。読めはしない。母国の言葉ならなんとか読み書きくらいはできるが、そうでなければ話すのがやっとだ。だから私が訳すときには誰かそれを書き取る者がいなければならなかった。筆記者は私のもとに代わる代わるやってきた。私は筆記者を統一してほしいと頼んだが、筆記者各々に各々の事情があるとのことで出来ない相談だと言われた。この仕事は諸々の事情があって半世紀に及ぶものとなったが筆記者の中には十年に一度とか二度とかその程度しか顔を合わせることのない者がざらにいた。私は人の顔を覚えるのが苦手でお久しぶりと言われてようやく気づくか気づかないかといった具合でたいてい最後まで認識できずに終わることのほうが多かった。この仕事にはいったい何人の筆記者が携わっていたのかいまだに私にはわからない。ひょっとしたら思っていたよりもずっと少なかったのかもしれない。本には筆記者の名前はどこにも記載されていないらしいから今や確認のしようもない。片手間でやっているような人も多かったと聞く。もっともなことだとあとから納得がいった。

　ちなみにこの本には私の名前も載せられていない。一応私は訳者の一人ということにはなっているらしいが、本には私とは別の名前が訳者として記されているにすぎないという。これは筆記者の一人が教えてくれたことで無論私には文字が読めないから彼が私を過度に不安にさせないようにそう言ったに過ぎないのかもしれない。

　本の価値低下には甚だしいものがあった。本は永久不滅と謳った者がそれからひと月もしないうちにメディアからその名が一切聞かれなくなった。彼女のファンが音声泥棒したとのかどで世間を賑わわせていたのも記憶に新しいことであったので私は驚かされた。

　本の大々的な批判を始めたのは実に読書家で学識のある人だったということで私には理解しがたいような理由からであったらしい。というのも私が彼の考えに触れたのはいつしかあちこちで耳にするようになった噂話とか風評のたぐいからでしかなく、もともと文字など読めない私はお前などには理解できない高尚な見識と言われればそれを信じておくことしかできなかった。何より異国の地で本の読めない私にとってはそういった風潮はむしろ歓迎すべきものであったしどこか安心させられるものがあったというのが本当のところで、世間でも私と同じように本当に本をよく読んでいるという人はほとんどいないようだったから肩身の狭い思いをする人は実際にはごく一部の人たちだけでさほど実害の及ぶようなところはないようにも見受けられた。もちろん陰で怒りを露わにしている人はたくさんいて、酒のサカナの一つになっていた。

　本が書かれなくなってから街頭で大声を張り上げる者が現れ始めた。ただ張り上げるだけではすぐに取り締まられてしまうとわかると彼らは歌うようになった。それからすぐに歌自体の取り締まりが始まった。それから街頭で踊り出す者が急速に増えてそれもすぐに下火になった。取り締まりは一時的なもので明文化すらされなかったが誰も叫ばなくなったし歌わなくなったし踊らなくなった。かと思えば、それから数年もしないうちに再び歌や踊りがまた世間の人たちの楽しみとなり始め、元の鞘に収まった。私にはまったく理解しがたいことだった。とはいえ、私の言っていることのうちにどの程度真実があるかはまったく怪しいもので、というのは私の家は森の奥深いところにあって私自身はめったに街に出ることはなく、街で起こっていることについては筆記者のおしゃべりを頼りにあれこれと想像で補いながらでしか私には思い浮かべることができないようになっている。筆記者も街の者ではなかった。彼らは街に行ったときの土産話をめいめい自慢げに語るのみだったと思う。しかし本が姿を消したのは本当のことだった。本屋は今ではどこにいっても見掛けることがなくなった。本はすべて燃やされてしまったのかもしれない。

　私が本の制作に携わることになるとは思いもよらないことだった。私に翻訳の仕事を持ちかけた人は本のことを心底嫌っていた。元出版社の編集者だという。彼は私の手を握ってしばらく沈黙していた。私の手は野良仕事で真っ黒だったから何か後ろめたい気持ちになってすぐにも手を引っ込めてしまいたかった。鴉が森に帰るところで空は騒がしかった。半分日が沈んでいて、隣の畑ではこちらの様子をちらちら窺いながら帰り支度を始めているところで、私も帰らなければと男に恐る恐る告げた。おらあ帰るよと隣の畑から声がして私が塞がっていないほうの手を振り上げて応じると、その頃には鴉の声も聞こえなくなっていた。

　いずれ文字はなくなるだろうと男は言った。確かに少しずつ文字は書かれなくなっているようだった。街からは文字の書かれた看板が消えていったと聞く。実際に近年私が見た看板には文字がなかった。男は何も突飛なことを言ったわけではない。世間で言われている何の変哲もない文句を繰り返したまでだったのだろう。断っておきたいのだが、私は文字があったほうがいいだの悪いだの言いたいわけでは全然ない。私の生きてきた中の一エピソードとして文字がなくなっていったという事実が現にあったということしか私は言う気がない。

　男は私が指を這わせながらたどたどしく訳していくと難しい顔でうんうん頷いて私の肩を叩いた。立派な訳ではないが実に丁寧だと言った。私はもともと首輪をつけられていた身で、彼はもちろん私のことを褒めたつもりで私も褒められたとわかり嬉しくなった。

　男は自分は海の向こうから来たと言った。お酒を飲むと男はよくしゃべるようになった。自分もだと言うと男は興味なさそうに自分の話を続けた。男が身の上話をしているあいだは、私は暖炉の火に視線を落としてグラスの中の氷をカラカラ転がしたりした。たまにうなずいたりした。男はどこかで働いているようなこぎれいな恰好をいつもしていた。

　私はどうして本が嫌いなのかと彼に尋ねてみたことがあった。彼は酔っていた。そういうときにしか私は何も聞けなかった。本は嫌いではないと彼はあっさり答えた。そもそも本が嫌いだという話は彼から直接聞いた話ではなかったから、事実が違ったのだと私は思ったけれど彼のほうでは私の質問をもっともなことだと思っているようだった。さてはこれは私にはわからないことかもしれないと思った。わけしり顔もできないので私は黙っていた。

　彼はお酒を飲むとそのまま眠ってしまう人だから、そうなると私は彼の着ているものを脱がせて代わりに寝巻を着せてベッドに寝かせてやる。ベッドは一つしかないし私は隣に寝るのだが、遠慮もあって私はベッドの隅っこのほうしか使えず結局そういうときはいつも眼が覚めてしまう。いつもは少し離れたところであたっているのだが、暖炉の前に椅子とテーブルを持ってきてひとりでお酒をちびちび飲んでいる。年中テーブルの上に広げっぱなしにしてある本にはいくつもシミをつくってしまった。そんなに厚い本ではないが一通り読み終えるのにひと月はかかる。何度も読んだが内容はまったく頭の中に残っていなかった。本のせいなのか私の出来の悪さのためかわからなかったがどっちもあるような気がしていた。私にとっては初めて読む本だった。訳し始めたのは懐かしい気持ちからであったが、次第に私のまるで知らない世界の話であることがわかった。知らない世界というのは比喩である。もっと的確に言うと、私にはわからないことであることがわかった。何も抽象的なことが書かれているわけではないが、たとえば目の前に寝ている男が本当は人間ではないかもしれないと言われれば私にもわかるが目の前の男が何某と言われても私にはわからない、そういうたぐいのわからなさであるかもしれない。こういうことを男に言ってみたことがあった。男はそんなに単純な話ではないのではないかと首をかしげた。彼は私にはもっとわからないはずだと言いたいようだった。だって私にはまったく理解できないのだから、と言った。彼が嘘をついていることは明らかだった。

　私にはこの本は必要ないものなのだと思うと彼に言うとその通りだろうと頷いていた。この本が必要な人は今じゃ病的だと世間から思われるよと言った。それは世間が間違ってるわけでも本が間違ってるわけでもないよと言った。つまらなくなったのか彼は話題をすぐに別にそらしてしまった。

　男は目が覚めるといつもすぐパジャマを脱いでいつも着ている黒いスーツに着替えてしまう。一晩経つと髭もぼさぼさで唇も乾燥と寒さのせいで青ざめて生気がなくなっている。顔色も悪い。別人のようだといつも思うが、昨日の話をするから本人であるとわかる。私は彼が帰るとベッドを一人占めできる幸福をかみしめてもうひと眠りする。

　私に筆記者を選ぶ権利は与えられていなかった。いま私がしゃべっている言葉を書き写してくれている人も私の意思とは無関係に派遣されてきた人で、彼の場合はよく仕事をこなしてくれるし要領もよくて助かるがもし仮にそれが私の気に入らない人物であったとしても私には彼の筆記を断ることができないことになっている。私が何か不都合なことを言えば書き換えられてしまう恐れはいつでもある。書き換えられたかどうか私には判断のしようがないから書き換えられないような伝え方をする術を身につけるほかなかったがそれも果たして功を奏していたのかどうだか私にはわからない。

　私の国の風習としてたとえばすれ違いざまにお互いのお尻の匂いを嗅ぎ合うというものがあり翻訳の際そういう情景を言葉で伝えねばならない、ということがあったとすると私はそのテクストの描写を直接相手に伝えるべきかどうかを躊躇する。実際にそういうことがこれまで数え切れないほどあった。むしろないほうが少なかったかもしれなかった。私はその都度筆記者の人格と向き合っていた。人格というとおおげさに聞こえるかもしれないけれど、筆記者の中にもいろいろな種類がいた。何を伝えても顔色一つ変えずに淡々と書きつけていくもの、私の伝えることにいちいち頷いたり相槌をうって顔の筋肉をまんべんなくくちゃくちゃと動かす人、私の言葉におそらく優越感からその表現は上出来だとかふさわしくないとか批評をしたがる人、こういう人達の顔色を窺いながら私はその都度彼に対してふさわしい物事の伝え方を考えていた。私は相手によっては例の場面をたとえばただ単に挨拶しただとか握手を交わしたとか翻訳の仕方を変えることもあった。向うから変えさせられることもあった。むしろ私の言葉を変えさせようとする筆記者が多くてうんざりするほどだった、だから私は先手を打って彼の気に入らない言葉をあらかじめ除けておくようになったともいえる。私の言葉はごらんのとおりひどく拙い。もしかしたら筆記者は善意から私の拙さを幾分か目立たないようにもしてくれているかもしれないが、そうでないとしたらとても読めたものにはなっていないことだろう。

　すでにお話ししてきたように筆記者はひとりではない。著者や訳者、話し手は一人であってもそれを書き留め書き残し編集する人の数は当り前のことなのかもしれないが数え切れない。数え切れないという言葉はしかし私の場合あてにならないかもしれない。私の国では数えることをしなかった。数字というものがなかった。指折りなどということもなかった。船で運ばれた先で投げ出されて這いつくばって土掘りをする私に監視役らしい男がよく私の頭に向かって手をかざしたものだった、すごい形相で。見上げると沈みかかった日を背にして大男の暗い影が左右にゆさゆさ揺れている。右手が私の顔の前に近づいたり離れたりしていた。開かれた大きな手があった。「イエッサ！」と私は言う。もちろん意味などわからない。彼らがよくそうしているようにしてみたまでだがそうすると男はさらに苛立たしげに私の顔に手を近づけたり離したりする。手の形の変化に気づいたのは私に向けられた男たちの不可解な憤怒やら嘆息にもほとほとうんざりしてきた頃で、私はまたかと思いあなたたちの茶番には付き合っていられないと言いたかったが代わりにほら私にはちゃんとやることがあると態度で示すにとどめた。私はいっそう深く土を掘った。彼らに言われているはずのことをちゃんとやっているのだから私が仕事にけちをつけられているとしてもそれはいわれのないことだ。そう思っているときだった。私は男の手の法則を突然何もかも理解した。それから私は無心に穴を掘った。男は私の態度をみて手を叩いて土も蹴ったりして私の注意を引きつけようと努力したが私はもう見向きもしなかった。理解とは恐ろしい。何もかも忘れてしまう。私は私が困惑させられていたものについてすでに想像でしかお話しすることができなくなっている、ということは私が何かを一挙に理解したとかいうことも実は甚だ疑わしい。

　私は筆記者が用を足しているあいだにもっと考えをまとめておくべきだった。筆記者は生きているから当然出るものが出る。無理に我慢する者もなかにはいないわけではないし、机の下に用意周到にバケツでも置いておくなりすれば筆記者が話の腰を折るなどということにはなるはずもないと思うかもしれないが、いまの時代そこまでする筆記者はいない、というのは真実ではない。筆記者はよくやってくれていると思う。時代は問題ではない。私は彼が今日何人目の男なのかもうわからない。だいたい用を足しにいったのか交替しただけなのかどちらともわからないままあとで気づくといつの間にか机の上で走るペンの動き方や脚のやり場、着ているもの、体格、臭気といったものがさっきまでのものとは違う。私は今もそうだがだいたい彼らの足元あたりに目をやりながら話していることが多くて、顔までちゃんと確認したことがないから彼らがどういう体制で仕事をしているのかが未だによくつかめていない。もしかしたら何人も交替しているようにみえるのは、二人とかせいぜい三人くらいの人が交替性でやっているだけなのかもしれないし、本当は私の思い込みで一日のうちに交替があることなど今まで一度もなかったのかもしれない。私はそのことを直接眼の前にいる男に聞けばわかることではあるのだが、聞いたことがない。彼は聞けばすぐに答えてくれることだろう。話を中断して彼に事実を確認することはいつでも可能だ。しかしあいにく誰もそんなことは求めていないだろう。親切に教えてやろうという気を起こす人さえいないほどのことだ。

　数がわかるといっても人の数もろくに数えられない私だから、この仕事のために幾年の歳月を費やしたかなどということを正確に覚えていないことなど言うまでもない。恐ろしく長いようで短いのかもしれない。よくあることで私は編集者の男と飲み明かした日のことを昨日のことのようにふと思い出し話すことがあるが筆記者からはきょとんとした反応しか返ってこない。それほどの歳月が経ったということではない。その男の記録がないのだ。記憶にないということではなかった。一体私は何を言い出したかというと私は依頼さえされていなかったかもしれないということだ。男が組織とまったく無関係であったわけではないだろうし、そもそも存在しなかっただなんて馬鹿げた話はない。